



## 独りじゃない

東海市立横須賀中学校 2年 大畑輝莉

「あいつさ、ほんと邪魔だよね。」

「それな。いないほうがまし。」

聞きたくなくても、無理やりにでも入ってくる。気にしないふりをして、耳をふさいだ。

「何のために生きるんだろう。」

ぼさっと呟いた独り言は、誰の耳にも入らず笑い声に飲まれ、騒がしい教室に消えていった。

私はいつからか、クラスの七人くらいから嫌がらせを受けていた。学校に来ただけで邪魔者扱いされて、仲間外れにされる。

「また来たの？懲りないね。ほんと。」

「ちょっと、声でかいよ。聞こえちゃうよ。」

止めてくれている、と思ったが、そんなことは無かった。

「でもまあいっか。今まで聞こえるようにいったけど、なんも言い返さないからね。」

言い返さないから。そんな理由で嫌がらせを受けるなら、言い返せばいい。そう思うかもしれない。けれど、そう簡単にはいかなかった。なぜならば、先ほども述べたような集団での嫌がらせであったからだ。集団だと、何が怖いのか。それは、情報量の差だ。私がどれだけ周りの人に訴えても、七人がそろって口を開けば、周りはそれを信じてしまう。そして、誰にも助けを求められない。それはまるで、明けない夜に降りそそぐ雨のようだった。いつそのこと消えてしまいたい。そんな思いが何度も頭をよぎった。何度か先生に注意してもらってはいた。しかし、雨は降り止まず、強くなる一方だ。体育などのペア等で七人のうちだれかと同じになると目の前で、

「ペアあいつかよ。マジ最悪。絶対負けるしほんとに嫌。」

「うわ、嫌だわ。自分の運動神経の無駄遣いだし。」

確かに私は運動ができない。だから、そう言われるのも無理はない。私は、嫌がらせを受けることが日常であると思うようになった。

「私とペアって嫌だよね、ごめん。」

と言うと、

「ごめんって思うなら見学したら？」

と、気怠そうに、舌打ちを打った。それをみて、こちらを指さしながら笑うのだった。それからか、雨はさらに強くなった。聞こえてきた話によれば、私を学校に来させなくするというものだった。ネットに悪口を書かれたり、雑用係として使われたり。学校に来て何も楽しいことは無いし、自分の心がすり減っていくだけだ。そんな思いが、日が重なるにつれ大きくなっていく。なぜなら、私には雨をしのぐ場所も、傘も何もなく、ただただ雨に打たれていたからだ。家族に相談するのは、なんだか自分に負けたような気がして嫌だった。だから私は、こう考えた。

「そうだ！生きる意味が無いなら死のう！」

と。早速私は、スマホで検索をかけた。

「死に方 簡単」

すると、予想外の結果が出てきた。最初に出てきたのは、どんな死に方でもなく、

「心の相談所 気軽に相談を」

と言う文章だった。それを見つけた私は、一度正気に戻って、その文章を読み返した。どうやら、チャット形式の無料相談ができるらしい。サイトが安全であることを確認し、恐る恐るリンクを押した。やり方は、悩みの内容を入力して、相談員の方につないでもらうというものだった。悩みの内容は、消えてしまいたい、死にたい。ただそれだけだ。それを入力して、相談が始まった。そして十秒ほど経った時、一通のメッセージが来た。

「この度は、ご利用いただきありがとうございます。安心してください。私はあなたの味方です。もし良ければ、何があったか話してくれませんか？」  
私はあなたの味方です。この言葉が、どれだけ暖かかっただろう。久しぶりに人の暖かさに触れた私は、現状をすべて話した。すると

「そんなことがおありだったのですね。とても辛かったのに耐えてきたあなたは、とても強いです。だからどうか、自分を責めないでください。その人たちにはできないことを沢山成し遂げています。だから、自信をもって自分のために生きてくださいね。」

それを見た瞬間、ため込んでいた涙が流れ、目の前がにじんでなにも見えなくなった。そうだ。これは自分の人生だ。ほかの人に支えてもらいながら生きるのだ。

それからは、家族に相談することもでき、嫌がらせもなくなった。学校が楽しい場所になった。まず私は、あの時の相談員の方に感謝したい。自ら命を絶って逃げようとしていた私に、そっと手を差し伸べてくれたのだ。だから私はその人にこう伝えたい。

「あなたのおかげで、今の私がいます。これからは、自分の人生を生きていきます。自信をもって、強く生きてます。もう逃げません。」  
と。そして、同じような境遇にいる人にも、  
「周りを見てごらん。君は独りじゃないよ。」と、同じように、手を差し伸べてあげたい。